

春 分 儀 式

I :: O :: S :: 儀式魔術文書 VE12A



THE OFFICIAL ORGAN
OF

I :: O :: S ::

PUBLICATION IN CLASS D
IMPRIMATUR : M FRATER I :: O :: S ::

THE VERNAL EQUINOX CEREMONY FOR ASTRAL WORKING
I :: O :: S :: ASTRAL TEMPLE WORKING

第1章 解 説

本儀式は、小規模な団内グループ(ロッジ単位程度)が、簡易な準備で行える霊的集合儀式(Astral Temple Working)として作成した。従って、実行儀式よりも簡略化した部分がある。

《春秋分点》は、「均衡と調和」を表象する宇宙的な時刻である。年に2回の分点において、太陽の運行または振動と地上の四大元素が融合する。本儀式は、原則的に春秋分点の前後48時間以内に実施すること。2012年の春分点通過は3月20日(火)午後2時14分(日本標準時)である。儀式内容は、四界のカヴァナーを使用して春分の祝祭を実施する。

なお、本編を書くにあたり、随所で手島佑郎『ユダヤ教の霊性：ハシディズムのころ』(教文社、2010年)を参照した。優れた著作であるので紹介する。

1 四界のカヴァナー

(1) バアル・シェム・トブ

バアル・シェム・トブ(ベシエト)は、18世紀初頭にポーランド南部で生まれた神秘主義者、本名ラビ・イスラエル・ベン・エリエゼルである。かれの通り名となった「バアル・シェム」とは、字義的には「名前の主」であり、ユダヤ人のなかでは呪符を取り扱う者の謂である。その語感があまり良くないため縁者が「善き(トブ)」をつけて「善き呪符師(バアル・シェム・トブ)」と呼んだ。⁽¹⁾かれは神秘体験を得てハシディズム運動を起こした。⁽²⁾

このハシディズムは、12世紀のドイツのハシディズム(ハシド・アシュケナージ)ではなく、⁽³⁾現在のユダヤ宗教界にも多大な影響を与えている神秘主義思想である。

その第1の特徴は、無学な農民や、工場労働者でも、学問がなくても参加できることである。ハシディズムの師匠たちは、当時死語となっていたヘブル語やアラム語を用いず、俗語で祈祷した(当時の多くのユダヤの下層民、ときには「義人(ツァディク)」でさえヘブル語が読めなかった。)。これが正統派のラビたちの強い反発を買った(ハシドと名乗り、聖なる白衣を纏った段階で白眼視されていたが。)。しかし、「無知な人間(アム・ハ・アレツ)」を重んじることが、ハシディズム運動の生命力を活性化した。ラビ・シュネウル・ザルマンの語るように聖人のカヴァナーでさえ、「床と椅子で祈る人」の前には退くのである。⁽⁴⁾

第2の特徴は、同じくすでに廃絶状態であったカバラの教えを導入したことである。ただし、誤解され易いのだが、カバラの魔術的信仰を取り入れた訳ではない。ハシディズムの世界観は独自のものであり、その思想背景にカバラの秘教的な説話を取り入れたのである。13世紀頃に成立したゾーハル派の神学からセフィロトのドクトリン(ルーリア学派のセフィロト論は、複雑すぎてハシドには好かれなかった。)を、イサク・ルーリア(ハ・アリ)の神秘主義思想から「収縮(ツィムツム)」、「容器の破壊(シェヴィラー)」及び「修復(ティクン)」などを取り込んでいる。⁽⁵⁾ラビたちは通俗のカバラを否定したが、ハシドは必ずしも否定しなかった。かれらは公には魔術的要素は否定したが、それを完全に切り離すことはできなかった。

⁽⁶⁾むしろ、ヘルメス学の立場から見ると、積極的に取り込んでいるようにさえ見える。⁽⁷⁾ただ

(1) Martin Buber, *Tales of the Hasidim : Early Masters*, New York : Schocken Books, 1947/1975, pp.11ff.

(2) ハシディズム運動が始まった時期については異論がある。ひとつはベシエトが公に教えを説いた1736年からとするもの、もう一つはベシエトが逝去し、弟子が遺髪を継いだ1760年とするものだ。

(Joseph Dan, *The Teachings of Hasidism*, West Orange : Behrman House, 1983, p.1.)

(3) ゲルシヨム・ショーレム『ユダヤ教神秘主義』法政大学出版局、1985年、3章 中世ドイツのハシディズム。

(4) マルティン・ブーバー『ハシディズム』みすず書房、1997年、56、61頁。

(5) Dan, op. cit., pp.7f.

(6) ナポレオン戦争時代のラビ・ヤコブ・イツハクの逸話としてブーバーが紹介した夜行の逸話は魔術そのものである(マルティン・ブーバー『ゴグとマゴグ』みすず書房、1970年、363-367頁。)。

(7) Moshe Idel, *Hasidism : Between Ecstasy and Magic*, Albany : State University of New York Press, 1995, pp.65-84.

し、ハシディズムに隠された教えはないため、カバラ、ヘルメス学等で密教（エソテリズム）として伝達されてきた領域も、顕教として教えられている。正確に言うと顕密の区別がない一つの開かれた教えなのだ。

第3の特徴は、神への恍惚状態の祈りが重視されたことである。ベシエトが祈るとき、かれは霊的世界に全身で没入した。かれは一度に何時間も祈ることがあり、そのときベシエトの顔は内側から松明のように輝き、眼球が突出した両眼から滂沱の涙が流れ、飛び跳ね、踊り、礼拝堂（シナゴグ）の周りを駆け回ることもあった。コロマヤの町で祈ったときは、伏した顔の色が様々に変化し、間近で目撃した子供が驚愕のあまり高熱を發して寝込むという騒ぎがあった。⁽⁸⁾ 別の機会に門を開く幻視を得たときは、ほとんど膝に頭部が接するほど後ろに反り返り、目が飛び出し、殺される牛のような声を發した。⁽⁹⁾ このようにベシエトは、恍惚状態で祈った。古代より、プロクルスらの秘教の達人が精神集中により恍惚状態（エクスタシス）となり、内部から光を發するという目撃談が多い。いわゆる天使の光輪や、聖人の光背、仏像の後光と同じものである。それは可視光ではなく、近傍の者が靈性を感じて、眩しく感じることから生じる。ハシディズムの教えによれば「恍惚（twbh lth ヒトラハブース）」とは「燃えあがること」である。「シェキナーとともに離散に従うこと」とも呼ばれる。⁽¹⁰⁾

最後の特徴は、上記を総合したものである。ハシディズムの勃興期のユダヤ教は行き詰まっていた。離散の下、外国人の蔑視と繰り返される迫害の下に少人数のコミュニティを形成しており、イスラエルの地に帰還（アリヤー）できる見込みは殆どなかった。しかも、ラビの教えは形骸化・学術化しており、民の慰めとはならなかった。

ベシエトは、この停滞したユダヤ人コミュニティに破壊的な衝撃と歓喜をもたらした。かれらは実生活や、自然な欲望も否定しなかった。

「（大天使メタトロンに變成した長老）エノクは靴直しであった。上革と底革を縫いつけるその針の一刺しごとに、かれは神とそのシェキナーを結びつけた。」⁽¹¹⁾

ハシディズムは、リアルな生を実感させてくれる。ある意味でリアルな魔術体験でもある。

（2）デベクース

ベシエトは祈りのもたらす心の状態をデベクースと表現した。その語源は、次のとおり。

「あなたの Myhl) hwhy を愛し、そのすべての道に歩み、主に密着 (hqbd lw) するならば」（『申命記』11章22節）

上記の「密着する (qbd ダバク)」という単語が、デベクースの語源である。

ショーレムは、この「密着（デベクース）」を「その字義通りの意味は、神との癒着、神との結合である。・・・それはたえず神とともにあることであり、人間の意志と神の意志の親密な調和であり、一致である。」と説明した。⁽¹²⁾ また、ベシエトのデベクースは、アリと同じ文脈（コンテクスト）のものであるが、アリへの反発はなかったのに対して、ベシエトの同じ主張は反ハシディズム派から猛烈な反撃を受けたと述べた。⁽¹³⁾

イスラエル・カレンは、ジョセフ・ワイズ（ロンドン大学教授、故人）のデベクース解釈を紹介し、「デベクースは、魂と神との理想的な密着を得るための黙想的実践であり、理想的な黙想の径（vita contemplative）である。」と述べた。そして、デベクースには「世界の外側

(8) Yitzhak Buxbaum, *The Light and Fire of the Baal Shem Tov*, New York : The Continuum International Publishing Group, 2006, pp.126ff.

(9) Joseph Dan, *The Heart and the Fountain*, Oxford University Press, 2002, pp.233f.

(10) Martin Buber, *The Legend of the Baal-Shem*, New York : Schocken Books, 1969, pp.17-23.

(11) ブーバー『ハシディズム』、110、111頁。

(12) ショーレム、前掲書、161頁。

(13) ゲルショム・ショーレム『カバラとその象徴的表現』法政大学出版局、1985年、36頁。

への黙想」と「世界の内側への黙想」の2種類があると説明した。⁽¹⁴⁾

ハシドは別の見解を持つであろうが、上記ワイスの説明は非常に適切である。理想的なデベクスとは、日常を含めて常に神と寄り添い生きることとされ、瞑想時の深い忘我体験だけではなかった。その意味で生活のすべての局面を黙想するというワイスの説明は適切だ。

デベクスに関連して、重要な観念がある。それはツァディクを核として、無限界を有限界に降臨させることである。ベシェトの重要な弟子、ポロノイのラビ・ヤコブ・ヨセフは次のように述べた。最後のセフィラであるマルクトは「われ（アニー）」の象徴である。そして、「われ」は、「思考（マハシャヴァー）」、第1のセフィラに接続している。ケテルは「無（アイン）」の象徴でもあるから、この「アニー」の「アイン」への変換により、アイン・ソフからマルクトへの流体の引き下ろしが可能となる。その中核となるのはセフィラ・アインの生ける代表たるツァディクである。ツァディクへ引き下ろされた天の流体は、かれから世界へと拡散する。⁽¹⁵⁾

星辰の流体を引き下ろすことは、『ピカトリックス』等により、ヘルメス学において長く実践されていた魔術技法である。ハシドたちが、これを応用する神学的根拠となったのが、アリの「収縮（ツィムツム）」であった。神が自らの内部へ収縮したこと。原初の無限空間が小さな空間に織り込まれたことが、「引き下ろすこと」の原型となったのだ。⁽¹⁶⁾

(3) カヴァナー

アリの体系には多数のカヴァノース（複数形）技法があり、それを習得するためには多年の努力を必要とした。しかし、ハシディズムは創始者のベシェトの時代から、ひとつのカヴァナー（単数形）を行えばよく、その本質は神との密着（デベクス）であるとした。

ラビ・ピンハスは、アリの祈祷書を用いた者たちを前にして言った。

「君たちは全力をカヴァノースに注ぎ込んだ。そして、心を尽くし、それを神に結びつけるという本質から遠ざかったのだ。」

ベシェトも語る。

「祈りのなかで知る限りのカヴァノースを用いる者は、正に知っていることのみに影響を与えるに過ぎない。しかし、密着して言葉を語る者は、カヴァナーがひとりで言葉に入り込むのだ。」⁽¹⁷⁾

そして、デベクスにおける段階的な上昇が必要として、アッシャーから、イエツィラー、ブリアー、そしてアツィルトへと上昇する祈祷（四界のカヴァナー）を紹介した。⁽¹⁸⁾

また、「何処より（Ny）m メアイン）知恵を見いだせるか」（『ヨブ記』28章12節）のメアインを「無から（Ny）m メ・アイン）」と読み替え、2重の意味を持たせた。⁽¹⁹⁾

2 司官の配置

(1) 司官の指定

本儀式に必要な司官は、PRAECEPTOR（PC）、すなわち「先導者」の1名である。

PCは、黄金の夜明け団の伝統的な白の法衣を纏い。白のネミスをかぶり、マントやその他

(14) Israel Koren, *The Mystery of the Earth : Mysticism and Hasidism of Jewish Thought of Martin Buber*, Leiden : Koninklijke Brill NV, 2010, pp.250f.

(15) Idel, *Hasidism*, p.113.

(16) Moshe Idel, *Enchanted Chains : Techniques and Rituals in Jewish Mysticism*, Los Angeles : Cherub Press, 2005, p.160.

(17) ブーバー『ハシディズム』、121、122頁。

(18) Norman Lamm, *The Religious Thought of HASIDISM Text and Commentary*, Hoboken : Yeshiva University Press, 1999, pp.154f.

(19) Lamm, op. cit., p.444, n.9.

の役職記章はつけていない。右手に「ハイエロファントの棒」をもつ。それは神殿を開き、つなげる権威の象徴である。

他の参列者は、内陣団員は白の法衣と白のネミスを、外陣団員及びプロベিশョナーは、黒の法衣と白黒縞のネミスをかぶり、手には何も待たず参集する。

ディオ・フォーチュンの内光協会のアストラル神殿儀式では、参集者は儀式場に座ったまま、光体（かれらはアストラル体と呼称）を下位アストラル神殿に投射する。そのとき光体は全裸であり、神殿の着衣の間（Robing Room）において、光の法衣を纏う。

（2）トーラーの宰相の召喚

司官は、マルクト神殿で律法の公爵を召喚し、メタトロンの顕現たる大天使の長上が「肉の衣を去る」までは、実効上の神（天使を使役する者）として活動する。この場合「肉」とは、魔術師の「光体」のことである。

3 アストラル神殿の構造

マルクト神殿を使用する。

4 魔術の技法的側面

（1）封印の受肉

起誓言などを多用するメルカバ神秘主義において、「封印（Mtwx）」は護符（amulets）に記されて術者が携行するほか、術者の肉体に直接書き込まれる場合があった。⁽²⁰⁾

マーヴィン・メイヤーらは、コプト語呪文の研究のなかで、ギリシャ語の聖なる七母音が神像の胸に入墨されている例を示した。⁽²¹⁾

バル・イランは、『マセー・メルカバ』の「七の封印」を例にとり、次のように述べた。「封印がどのように刻印されたか、さだかではない。祈祷する神秘家の四肢に封印が刻印され、神聖なる霊視を得るための不可分的手段となっている。」⁽²²⁾

（2）聖四文字の呼吸

聖四文字の呼吸においては、ベリマーが世界が流出を開始する以前の「無の性質」に直結し、マーが流出後の「有の性質」を表現する。

呼吸法において、hy を詠唱する際は、「ヨー・ヘー」と発声する。瞑想中は、呼吸する際に喉を空気を通る音ぐらいの高さで囁く。息を吐きつつヨーと詠唱し、息を吸いしつつヘーと詠唱する。その際は、心中にそれぞれの文字を視覚化する。⁽²³⁾

息を吸いながら発音するのは難しいが、無理に大きな声を出す必要はない。その音は術者の心のなかに響きわたれば良いのである。

今回は、すでに境界を跨いだアストラル・ライトのなかで、「無の性質」を象徴するヨド・ヘーの呼吸と「有の性質」を象徴するヴァウ・ヘーの呼吸を併用し、祭壇の上に「有と無の融合」を現出させる。

（3）呪歌の力

本儀式においては呪歌を使用する。

ヘブル語においてシーラー hry# （複数形シーローズ twry# ）とはシャントを意味す

(20) Janowitz, *Icons of Power*, pp.79f.

(21) Marvin Meyer, *Ancient Christian Magic*, Princeton : Princeton University Press, 1999, pp.231, 280.

(22) Lesses, *Ritual Practices to Gain Power*, p.317f.

(23) Gershon Winkler, *Magic of the Ordinary*, Berkley: North Atlantic Books, 2003, p.30.

る言葉である。『申命記』第31章に説明されるとおり、折りに触れユダヤの民が歌うようにと定められた歌のことだ。

ラビ・シェファ・ゴールドによれば、シャントの恍惚体験は全き献身による観想的空間への移行を可能とする。観想的沈黙の文脈のなかにおいてシャントの力が深化し、発展するための空間が作り出される。シャントは『詩編』23章5に示された「溢れる盃」（コシ・ルバヤ hywr yswk）である。そして、あふれる盃には2種類があり、シャントを唱える者たちのなかに生成される。

第1の盃は、各人の心臓の上にある内的な盃であり、盃には生命と愛の源泉から途切れることのない流れが注ぎ込まれあふれ出ている。シャントは、その流れと自分自身を再結合する。

第2の盃は、シャントを唱える集団のなかに生成される。唱和するシャントの音と、注意力の共有が盃を生む。その盃には神聖な流れが注ぎ込んでおり、集団に属する誰でも盃からあふれる神聖な流れに触れることができる。⁽²⁴⁾

（4）詠唱の力

ヘブル語の神聖名は、文字として書かれた場合でも声に出して歌うのと同等の効力を発する。しかし、シャントを正しく用いると特別な効果が生じるのは前出のとおりである。

一方、ヘハロース文学によくある長い呪文は、シャントではなく詠唱（Hymns）で行われた。それは深く感情をこめ物語られたのである。詠唱部分以外の説明文を読むと、言われた（アマール）とか、物語られた（シロース）と書かれてある章句は詠唱である。⁽²⁵⁾

『マナセの祈り』に曰く「神は深淵を閉じ、力強く誉れある自らの名で封印した」⁽²⁶⁾

（5）感覚の遮断

ある無記名のカバリストはヒトボデドゥースの要点は目を閉じることだと述べた。⁽²⁷⁾

室内を暗くして黎明視を求めるのも、ほぼ同等の行為であるが、感覚が遮断され、物理的な世界から隔離されることで、幻視が深まる。瞑想中は、目を閉じて、または、半眼となっていることが望ましい。むしろ、所作を伴い、危険のある場合は異なる。

（6）黎明視

視覚情報の混乱による幻視「シャルル・ボネ諸侯群」⁽²⁸⁾、言語入力 of 混乱、呪文の反復（単純類似構音の連続による記憶操作⁽²⁹⁾）などを利用する。

（7）祭司の手

アブラフィアは『セフェル ハ・ヘセク』において、手の操法を述べた。⁽³⁰⁾

「両目を天に向け、左手と右手を天に掲げよ。あたかも祭司がなすように、（10本の）指を分け、5本を一方に、5本を他方に向けよ。左手の2本と、右手の2本（つまり、両手の）の小指（ケミザー）と薬指（ツェレット）をひとつにし、反対側の2本もひとつにする。両者を分け、親指は立てたままとする。・・・そして、神のもとにあげていた両手をただちに おろし、10のセフィロトを思いつつ、5つのセフィロトが5つのセフィロトの上にあるように、左手を心臓の上に置き、右手をその上に置く。」



(24) Rabbi Shefa Gold, "That This Song May Be a Witness : The Power of Chant", in *Meditation from the Heart of Judaism*, Woodstock : Jewish Lights Publishing, 1997, p.85.

(25) Peter Schafer, *The Origins of Jewish Mysticism*, Oxford : Princeton University Press, 2011, p.246.

(26) The Player of Manasseh, in *The Old Testament Pseudepigrapha*, New York : Doubleday, 1985, p.634.

(27) Idel, *Studies in Ecstatic KABBALAH*, p.134.

(28) <http://jiten.com/dicmi/docs/k12/17252s.htm>

(29) グザヴィエ・スロン『認知神経心理学』白水社、1995年、63、64頁。

(30) Idel, *The Mystical Experience in Abraham Abulafia*, pp.29f.

両手の10本の指はセフィロトに照応し、開いた手はメノラーのかたちをしている。

5 身辺の準備

(1) 部屋の準備

部屋を暖かくし、プライバシーを保護できるような態勢づくりをする。(家族に部屋に入らないように断ってからドアの鍵を閉める等)、携帯電話、アラームの類はあらかじめ切っておく。部屋の中央に快適な椅子か、ソファを置き、その他の不要なものを片づける。

部屋を薄暗くする。小さな照明を利用する場合は、背後に置き、その光を直視しないように配置する。

何度も反復して練習し、象徴や、儀式の細部まで呑み込んでいても、外部の妨害ですべてが台無しになることもあり得る。準備は、怠りなく。

(2) シナリオ

今回も、シナリオ文書を単純化したので記憶してもらいたい。黎明視の妨げとなるので、テープの録音も不要である。

あなたの行動する部分は緑の文字で記してある。

神聖名を発音するときは、注意深く行うこと。

事前のリハーサルは勿論、必須とも言える。

(3) 直前の手順

開始する前に手を洗い(儀式的沐浴)、法衣(または身体を締め付けない服装)に着替え、LBRPを行って椅子に座り、中央の柱の行法で活性化する。

第2章 儀式

1 神殿への入場

この準備的作業は、光体のレベルではなく、生身の肉体で行う。

参加者は、東に面して座り、目をかすかに開き（いわゆる半眼の状態）にする。視線は足下に落とし、家具などの周囲の状況が明確に像を結ばないようにする。瞼を開く程度を変えて、この焦点を結ばない状態を維持する。気持ちが悪くなった場合は、普通に眼を開いて、もう一度調整する。

半眼のまま、深く呼吸をする。呼吸は肺だけではなく、全身の皮膚を通して行う。一息ごとに、喉や鼻孔のみならず、全身の皮膚から、周囲に満ちている生気が肉体に吸い込まれ、全身の細胞を活性化する。

あなたは光のトンネルを通過して、アストラル神殿の外庭に着地し、扉の前に立つ。マルクト神殿のヤキンとボアズの柱を通過し、青銅の扉に面すると、扉の表面に刻まれたIOSの三文字が内側から光を発し、扉は音もなく両側に開く。

神殿の内陣広間に通じる廊室において、兄弟姉妹たちが集っている。

2 ウシャブティ

先頭に立ち、集まった参加者を振り返るPCが静かに命じる。「ウシャブティを纏うべし。」PCは、率先して「小神像（ウシャブティ）」を纏う。

すなわち頭頂の光球から光を拡散し、やわらかな膜のような形に引き延ばして、喉の光球に結びつけ、さらに胸と背を通して、胴の光球を振動させ、腰を振動させ、最後は足下の光球を振動させ、全身をひとつの巨大な光の膜で包み込んでしまう。その無定型のオーラの卵を好みの神、天使、神話的形態に変化させる。この場合は、司官は顔のないアケファロスの姿形をまとう。参加者は、文字通りエジプト神話の代理神像である直立した人間の姿をもつ霊的姿形を纏う。

PCは、廊室の中央の扉をくぐり、本殿に入る。

兄弟たちは、廊室でしばし準備のできるのを待つことになる。

3 物見の塔の儀式

PCは、祭壇の西側に回り込む。自らのオーラを広間全体に広げる。そして、拡張した白く輝くオーラを保持したまま、小五芒星の追儼儀式を行う。

引き続き、小六芒星の追儼儀式及び物見の塔の儀式を行う。

参加者は、その動きを廊室から、おぼろげな円運動による渦の発生として捉える。詳細なPCの動作を視覚化する必要はない。

4 入場及び宣言

PCは神殿の西の壁を背にして、東を向き合図の鈴を鳴らす。

PCの霊的な鈴の合図で、参加者の入場が始まる。

兄弟たちは右側、すなわち南の壁際に立ち、姉妹は左側、北の壁際に立つ。

PCは、内側を向いたまま次の言葉を宣言する。

PC：「I ∴ O ∴ S ∴ の兄弟姉妹たちよ。春分の儀式を開始せん。」

5 律法の宰相の召喚

PC：「七つの封印を光体に刻印せん。」

PCは聖なる名前を唱えたあと、剣指をつくり、揃えた両膝に当てる。

参加者もPCの動作に倣う。

PC：聖名とともに唱える。「アブリース ススティイー。わが脚を封じる。」

(yytss syrww)

全員：「わが脚を封じる。」

PC、参加者は剣指を心臓に当てる。

PC：聖名とともに「アバグ バググ。わが心臓を封じる。」(ggb gb))

全員：「わが心臓を封じる。」

PC、参加者は剣指を右肩に当てる。

PC：聖名とともに「アリム ティパー。わが右腕を封じる。」()pyt Myr))

全員：「わが右腕を封じる。」

PC、参加者は剣指を左肩に当てる。

PC：聖名とともに「アブリース セシー イアー。わが左腕を封じる。」

(h)y yst syrww)

全員：「わが左腕を封じる。」

PC、参加者は剣指を首に当てる。

PC：聖名とともに「アビス セル バグ エル ヤーブ ドゥーエル。わが首を封じる。」

(l)wyd wyy r) gb lt tyb))

全員：「わが首を封じる。」

PC、参加者は両手を胸の前で組む。

PC：聖名とともに「アブ パク キテル スス エイカド ヤドヤド ヤー。わが生命とすべての部分を守護するために。」(hy dydy dx) ss r+yq K)p w))

全員：「わが生命とすべての部分を守護するために。」

PC、参加者は両手を頭上高く差し出しV字を形造る。

PC：聖名とともに「オーブ パス ヤーウ キーブ ヨー ザハブ ヤーウ ティティス。わが天蓋を封じる。」(styt why whz wy wyx why tp Pw))

全員：「わが天蓋を封じる。」

PCは封印の完成とトーラーの宰相への呼びかけを行う。

祭壇の傍らにいるPCの上に覆い被さるように出現する巨大な天使の像がウシャブティを呑み込む。アケファロスの顔のないオーラに、律法の宰相のテレズマ的姿形が融合し、再形成されてPCの霊的外形が急激に変化する。

PCが宣言する。

PC：「われは、聖なる五つの文字に表象される無敵の一者なり。

四風を聖化するは、われなり。

五界を結ぶは、われなり。」

6 四風の聖化

PCは東を向いて宣言する。

「I ∴ O ∴ S ∴ の神殿に四方位の風を召喚せん。」

神殿の東壁の中央に扉が現れた。

PCは、東に向い高らかにヘブル語を詠唱する。それは、四方位の風をふるわせる呪歌である。

PC：「エロウイー

(yhl) わが力の根元よ。)

ネシャマー・シェー・ナタフター・ビー

(yb twhtw) n h) w # hm # n 汝が授けし息吹よ。) ⁽³¹⁾

テホラー・ヒー

(yh hrh + そは清浄なり。)

アター・バラター

(ht)) rb ht) 汝がそを創造せり。)

アター・ヤツアルター

(ht) rcy ht) 汝がそを形成せり。)

アター・ネファクター・ビー

(yb ht) xpn ht) 汝はそを我に吹き寄せる。)

ヴェ・アター・メシムラー・ブキルビー

(wrqb trm # m ht) w また、汝は我がうちにあるそを監視する。)

ヴェ・アター・アティード・リット・ラー・ム・メフニイー

(ynpmm w) l + l d +) ht) w また、汝はいつかそを我より取上げる。)」

全員：「バラフター・ヴェ・ヤツアルター

(ht) rcyw ht)) rb 創造と形成)」

PCは、東の方向に宝瓶宮のサインを描く。

PC：「ヒー・ネイ・ニー (yn hnh われはここに)

ヒー・ネイ・ニー (yn hnh われはここに)

ヒー・ネイ・アーニー・ヤー (hy yn) hnh われはここに、神の息吹の)

アナ・ホッシーアー ((#why hn) 加護のあらんことを)」

全員：「ヤー・アナ・ホッシーアー

((#why hn) hy 息吹の加護あらんこと)」

PCはヨド・ヘーの呼吸を始める。全員それに唱和する。

PC：「ヨー」(呼気)「ヘー」(吸気)「ベーリー・マー」(無の性質を強く意識する。)

全員：「ヨー」(呼気)「ヘー」(吸気)「ベーリー・マー」(無の性質を強く意識する。)

東の壁いっぱいに、黄色い照り返しを浴びた雲海がひろがる。

雲海は下から湧きあがる雲の断片で沸騰するようだ。

その黄色い雲の渦の中心に、灰かな薄暗い陰が生まれる。

その陰は人型をつくる。人型の頭部が紫色の光を放つ。

これはエロヒムの影だ。

(31) 来る ()wb) の変化形 (yb) は、「霊が我がうちに入りたり (xwr yb)btw)」(『エゼキエル書』2：2) のように使われる。

PCは、祭壇の南に回り、南の方向に獅子宮のサインを描く。

PC：「アーニー・ボー (whb yn) われと名前なきもの)
アーニー・ボー (whb yn) われと名前なきもの)
エロヘイ・イスラーエル (l)r#y yhl) 主の力よ)」

全員：「エロヘイ・イスラーエル (l)r#y yhl) 主の力よ)」

南の壁いっぱいに、紅蓮の炎が燃えさかる。
爆発的な溶岩の噴出、燃え上がる硫黄の噴煙を炎の陰に垣間見る。
その炎の壁のただなかに、巨大なたてがみのある生き物が見える。
強靱な爪のある筋肉の束が炎を掻き分ける。
それは獅子のすがたをもつ炎である。

PCは、祭壇の西に回り、西の方向に天蠟宮のサインを描く。

PC：「アーニー・ボー (whb yn) われと名前なきもの)
アーニー・ボー (whb yn) われと名前なきもの)
ホウシーアナ (hn) (#why われを助けよ)」

全員：「ホウシーアナ (hn) (#why われを助けよ)」

PCはヴァウ・ヘーの呼吸を始める。全員それに唱和する。

PC：「ヴァウ」(呼気)「ヘー」(吸気)「マー」(有の性質を強く意識する。)
全員：「ヴァウ」(呼気)「ヘー」(吸気)「マー」(有の性質を強く意識する。)

西の壁いっぱいに、ブルー・オーシャンがひろがる。
それは砂浜近くの明るい海水ではなく、海底の伺えない深海の青黒い海原である。
小島ほどもある巨大なうねりが押し寄せてくる。
その大うねりの海水の表面に、途方もなく巨大な翼ある生き物の影が映る。
それは鷲の翼のようである。

PCは、祭壇の北に回り、北の方向に金牛宮のサインを描く。

PC：「アーニー・ボー (whb yn) われと名前なきもの)
アーニー・ボー (whb yn) われと名前なきもの)
エレッツ・カーナーニー (yn(nk Cr) カナンの地よ)」

全員：「エレッツ・カーナーニー (yn(nk Cr) カナンの地よ)」

北の壁いっぱいに、乾いた大地がひろがっている。
地平線の彼方には、雲をまといつかせた山脈が遠望できる。
彼方の雪の峰から手前にかけては、なだらかな丘陵地帯になっており、
その丘の上に角のある生き物の影が射す。
生き物は牡牛のように見える。

7 四界のカヴァナー

PCは、祭壇の西に回り、東面する。全員が東面する。

PCは両手を祭司の手のかたちとし、そのまま額より高く掲げる。

全員が祭司の手をつくり、両手をあげる。

PC：「絶対無なるものから、絶対全たる万有は流出する。
アッシャーの神殿から靈魂の上昇を行わん。」

PC：「導きの大天使メタトロンよ、
シャダイ (yd#) と、ターフ・カーフ・ヘー (hkt) の御名により、
イエツィラーの大海にわれらを迎えよ。」

全員：「シャダイ (yd#) と、ターフ・カーフ・ヘー (hkt) の御名により、
イエツィラーの大海にわれらを迎えよ。」

PCが両手を広げたまま上昇し、弾丸のように天井を突き抜けていった。

それに僅かに遅れ、全員の身体が大天使メタトロンの見えない巨大な指で引き寄せられるように浮き上がる。マルクト神殿の天井が裂け、大いなる水面に頭から飛び込んだ。冷たい重い海水が、全身を包み込み、水圧が肌を押す。一挙に深海に潜没したように、周囲は微かに発光する小さな生き物のほかには、真っ暗で何も見えない。その暗黒の深海を兄弟姉妹たちが、上へ、海面へと上昇しているのを目ではなく、心で感じる。水中を海豚が疾駆するように、大天使メタトロンの指に引き寄せられ、矢のように上昇する。頭をあげると、上方に明滅する光が見え、それが輝く煌めきの鏡のようなものになり、全身が揺れる鏡のような海面を突き抜けて空中に出た。

足下には長大な周期でうねる青黒い海面がひろがる。その上空数メートルに、全員が神殿の床に並んだ配置のまま空中に浮遊していた。PCを見る。

PCは祭司の手のまま、上空を仰ぎ、言う。

PC：「若き長老たる大天使メタトロンよ、
シャダイ (yd#+) と、ターフ・ターファ・ヤー (hyp+p+) の御名により、
ブリアーの蒼穹にわれらを迎えよ。」

全員：「シャダイ (yd#+) と、ターフ・ターファ・ヤー (hyp+p+) の御名により、
ブリアーの蒼穹にわれらを迎えよ。」

PCが祈りの姿勢のまま、暴風のような風に押されて上空へ飛翔した。

瞬時に小さく遠くなるPCに僅かに遅れて、全員の身体が大天使メタトロンの見えない翼で包まれ、高速で飛翔し始める。思慮する暇もないほど早く、四周は青空だけとなり、足下を垣間見ると海が朧な青い円となり、光輝く惑星の姿が見え始めた。周囲の空間は青みを帯びた空から、紫色に変化し、殆ど暗黒の星空が現れる。流星が幾筋か、左右を横切っていく。上方を仰ぎ見ると、かすかな雲のような染みが見え。それが忽ち広がると、周囲は薄霧のかかったように視界が制限され、望見した兄弟姉妹たちは雲のなかの朧な影となった。ときおり、稲妻が雲を切り裂く。

突如、視界が開け、どこまでも広がる白銀の雲海の上に出た。全員が神殿の床に並んだ配置のまま空中を飛翔している。PCを見る。

PCは祭司の手のまま、上空を仰ぎ、言う。

PC：「小ヤーウェたる大天使メタトロンよ、
ヨーハーワーウヘー (hwhy) と、
カーフ・ワーウ・ザーイン・ワーウ (wzwk) の御名により、

アツィルトの光輝をわれらに拝顔させよ。」

全員：「ヨーヘーワーウヘー (hwhy) と、
カーフ・ワーウ・ザーイン・ワーウ (wzwk) の御名により、
アツィルトの光輝をわれらに拝顔させよ。」

PCの姿が瞬時に消えた。

全員の身体を天の火が貫く。視界が反転し、夥しい輝きの広間を目にしている。広間の門は、天使団が武装して警護している。門番たちは、あなたを武器で威嚇しながら、質問する。

「メアイン」(Ny)m 何処よりきたのか。」

PC：「メ・アイン」(Ny)m 無からきたれり。」

全員：「メ・アイン」(Ny)m 無からきたれり。」

天使団は武器を納め、全員が門を通過した。磨き抜かれたハシュマルの輝きの広間の中央に光の祭壇が出現した。⁽³²⁾

PC：「祈りの声を聞かれない。偉大にして強大なる主よ。

高貴にして慈悲深き君よ、その眼差しは被造物にあまねく下される。

汝が従僕たる祈り手に向き直り、好意を持ち答えたまえ。

全宇宙の主よ、万物の造り主よ、宇宙の一者よ。

わが叫びに答え、天の門を開きたまえ。

汝が膝下にある貴顕の御名を召喚するものなり。」⁽³³⁾

PCが高らかに唄い始める。

PC：「リー・イエー・シュー・アッ・チャー・キー・ビー・ティー・シャーディー
(yd# Cwbq hyx) #y yl 汝が導きにわが望みを主よ。」

キー・ビー・ティー・シャーディー・リー・イエー・シュー・アッ・チャー
(hyx) #y yl yd# Cwbq 我が望みを主の導かれるままに。」

シャーディー・リー・イエー・シュー・アッ・チャー・キー・ビー・ティー
(Cwbq hyx) #y yl yd# 主の導きに我が望みを。」

PC：「サティームー・ヴェ・グー・リアー ()ylgw Myts)」

全員：「隠され開示されたり。」

PCのオーラの炎が静まり、煌めく輪郭が炎の変容の名残を示すだけとなる。

聖化した四方位の風に取り巻かれ、四界へ密着せる宮殿において、春分の秘儀にあずかる。

(32) ベシエトは祈禱(カヴァナー)により四界を突き抜けた。本文中に使用された神名はハシドたちが用いた「思念流を清浄化するルーリア流の儀礼」から引用した。タフカフヘー(ThKH)は、シャダイ(ShDI)を変換したもの(Sh→Th, D→H, I→K)。タフタフアヤー(TPTPIH)は、メタトロンの72通りの異名のひとつ、字義どおりには「若き若きヤー」である。KVZVは、コクマーに作用する聖四文字の変換名である(Trans. R. M. Kallus, *Pillar of Prayer: Guidance in Contemplative prayer, Sacred Study, and the Spiritual life, from the Baal Shem Tov and his Circle, Mockingbird: Fons Vitae*, 2011, pp.51-57.)。

ベシエトの四界のカヴァナーは、シェキナーを招きながら四界をデベクースの段階と捕らえて、徐々に祈禱のなかで止揚する(手島佑郎『ユダヤ教の霊性：ハシディズムのこころ』教文社、2010年、102-109頁)。

なお、視覚化されたイメージはヘルメス学等の象徴を結びつけたものであり、ベシエトとの直接の関連はない。

(33) James R. Davila, *Descenders to the Chariot*, Boston: Brill, 2001, p.113.

PCは、神殿の北に行き、南を向いて言う。

「この場は、光と闇の至聖処なり。
今、頭上に春分の太陽があり、
光は闇と均衡せんとしている。
われは律法の宰相として、
春分の執行を宣言する。」

8 春分の主祭

PCは、神殿の東側から中央を向いて言う。

PC：「祭壇に宇宙の軸を召喚せん。
IaHaVaHa（ヤァー・ハァー・ヴァー・ハァー）
HeVeHeIe（ヘイ・ヴェイ・ヘイ・イエイ）
VoHoIoHo（ヴォー・ホォー・イョー・ホォー）
HIHV（ヘー・ヨド・ヘー・ヴァウ）」

PCが宣言する。

PC：「大いなる周行をもって、祭壇に集中せん。」

祭壇を軸として、3度周行する。

PC：「神秘なる周行は完成し、昼と夜は均衡した。春分は到来せり。」

PCは、祭壇の東に立ち、西に向かってハーポクラテスのサインを行う。

PC：「深き闇に拝礼す。光は闇より生まれたり。神殿の古きパスワードは・・・なり。」

PCは、祭壇の西に廻り、東に向かってホルスのサインを行う。

PC：「全き光に拝礼す。闇は光に内在せり。神殿の新しきパスワードは・・・なり。」

PC：「パスワードは交換された。」

全員が祭壇を取り囲む。

PC：「腕を組み、手と手を取りて、われらのオーラをひとつに融け合わせよう。
無敵なる主の顕現にあずかりて、われらの靈魂をひとつとなし、
そをもちて、この神殿は栄光の場とならん。」

全員が手を組み輪のなかに祭壇を包み込む。

手を放すことなく次を唱える。

全員：「主よ。われらは自らを捧げん。
わが心臓と靈魂は、汝への絶ゆることなき供物とならん。
汝が御手の技の裔を受け、汝の意志のままに与え、奪いたまえ。アーメン。」

全員、東を向く。

全員：「聖なるかな、汝、宇宙の主よ！
聖なるかな、汝、自然の造らざる者よ！

聖なるかな、汝、広大にして強大なる者よ！
光と闇の主よ。」

9 諸天使の出立

宮殿の床が瞬時に溶け落ち、全員がマルクト神殿に降り立った。
P Cは祭壇の北に行き、南を向く。

P C：「翼の王たる大天使メタトロンの加護に感謝する。
霊の虚の場所に戻りたまえ。」

P C：「律法の宰相の加護に感謝する。
霊の虚の場所に戻りたまえ。」

P Cは再度、祭壇の西に行き、東を向く。

P C：「聖なる五つの文字に表象される長老たちよ。
ヨド・ヘー・シン・ヴァウ・ヘー (hw#hy)
万軍の将、霊の虚の場所に住まわん。
ヨド・ヘー・ヴァウ・シン・ヘー (h#why)
戴冠せる王、霊の虚の場所に住まわん。
光と闇の轡轡を逆転し、魔術師の肉体を脱ぎ捨て、光へと帰還せん。」

P C：「主よ、われらの賛歌を聞きたまえ。宇宙の韻律と調和に、感謝を捧げん。
主の聖霊は、森羅万象の上にあり、下にあり、内にあり、外にもある。
主よ、生ける霊と人の子らに、法悦と祝福を与えたまえ。
律法の宰相は、肉の衣を去れり。」

全員：「主よ、われらに祝福あれ。われらは絶えることなく汝を称えん。」

10 地上への帰還

P C：「人の子らよ。律法の宰相は、去れり。されば、地上に帰還せん。」

P Cは《ヴェールを閉じる》サインを行う。

P C：「イエヘシュアーとイエホバシャーの御名において、
この儀式により拘束されし、すべての《霊》を解放せん。」

P C：「われは宣言する。神殿作業は終了せり。」

全員：「神殿作業は終了せり。アーメン。」

神殿の外へ出る。神殿の外庭でウシャブティを解放し、光の洞窟を通過して光体は自分の部屋に戻る。静かに肉体に戻る。四肢の感覚が戻ったところで、光の法衣を脱ぐ。（特別な手順は必要ない。）光の法衣とともに儀式中に刻印された封印、その他の印は精妙界に去る。

その後、静かに目を開き、立ち上がる。

法衣を着用している場合は、沈黙のうちに着替える。

普段着に戻り、儀式についての個人的メモ（『魔法日記』用）を終わるまで、この沈黙が続けるのが望ましい。その後は、軽い食事、飲み物等を探り、地上に帰還したことを自分自身に印象づけること。

VERBORUM PUBLICA
I : O : S :
RITUALE DE
AEQUINOCTIO VERO XIA

IMPRIMI POTEST : I : O : S :
NIHIL OBSTAT QUOMINUS IMPRIMATUR
IMPRIMATUR : M.E.S.A. 5=6
MARTIUS MMXII

春分儀式 VE 1 2 A

Copyrights © All rights reserved I : O : S : 2012

2012年3月14日 I : O : S : 発行

本文書は、複数のまたは個人の団員が、魔術実践の練習のために使用するものであり、I : O : S : の公式儀式手順書ではない。従って、本儀式を公に実施するテンプル、ロッジはその旨を会員に明確に告示する必要がある。しかし、それは同時に本文書を利用した会員の自由な実践活動を妨げるものではない。会員外の使用については、I : O : S : の許可が必要である。本文書の著作権は団に所属する。本文書の内容の一部または全部を、団の文書による許可なく、機械的、電子的、光学的、霊的、その他の手段で複製、引用、転写することを禁じる。

表紙図版：イエレナ・ポレノバ『イワン雷帝と火の鳥』1896年